

## 歯科衛生士の保険診療が すべてわかる一冊！



### 歯科衛生士のための歯科診療報酬入門

公益社団法人日本歯科衛生士会 監修  
鳥山佳則・石井拓男・武井典子・吉田直美・金澤紀子 編著

B5判/256頁 定価：本体 3,700円＋税  
医歯薬出版（2017年5月）

(株)デンタルタイアップ  
評・小原啓子（歯科衛生士）



本書を手にしながら「やっと歯科衛生士が診療報酬について前向きに学ぶときがやってきたのだ」と感慨深く感じ、時代の動きを本書にみました。

診療報酬を語るということは、未来の日本を語るのと同じぐらいの価値があります。本書の前半は、診療報酬の総論、医療保険制度の概要、歯科点数表とは何なのかについて述べられています。なぜここからの説明が必要なのでしょう。

昨今日本の経済状況は厳しく、すぐにでも立て直さなければなりません。2016年12月に経済財政諮問会議から出された「経済・財政再生計画改革行程表」の最初の部分には、社会保障分野の医療介護提供体制の適正化について、2020年までに行う社会保障を含めた「財政再建」や団塊世代が75歳に達する段階での社会

的対応として整えるべき「地域包括ケアシステム」、そして団塊世代の方々の“人生の最終段階”への対応と団塊ジュニアの方々が60歳を超え、生産年齢人口が激減する「2035年問題」についての見解が示されました。これからは待たなしで、改革は進んでいくことでしょう。歯科医療のあり方も医療保険制度の変化とともに変わっていきます。

目標に掲げていた「8020運動」の達成者は50%（平成28年歯科疾患実態調査）です。また、12歳時の平均齲蝕数は0.86本（平成27年度学校保健統計調査）で、カリエスフリーは62%となっています。こういったところからも、対処療法の時代に終わりがみえはじめたように思います。これからは、間違いなく「予防」と「継続管理」の時代へとシフトしていくはずで、それに伴い歯科衛生士の役割はさらに大きくなることでしょう。

本書の後半部分では、実際に多くの歯科衛生士が臨床現場で携わっている業務に関する診療報酬について、事例に基づき解説されています。ただポイントがまとめられているだけではなく、図やグラフなどを用いて明確に示されています。最後の付録では、処置別に項目とその保険点数が示されています。明日の臨床から、実践的に使用できる便利な付録だと思います。

これからは歯科衛生士が、診療所においては「ユニットを預かり患者さんを継続して予防管理していく」、周術期においては「病診連携を進める」、歯科訪問診療においては「専門職種として“訪問歯科衛生指導”に出る」時代です。当然その業務に対する診療報酬の理解なしには、プロとしての医療提供はできません。「木を見て森を見ず」ではなく、しっかりと森を見たいうえで、木のあり方を見るようにしましょう。本書は時代を牽引する一冊だと思います。ぜひ一読ください。